

《資料》

ハルトマンの哲学思想

——特に「範疇法則」について

杉 田
永 島
輝
雄 勇

目次

- 一 その生涯と主な著作
- 二 方法論
- 三 認識論と存在論との関係
- 四 範疇法則
- 五 倫理学
- 六 ハルトマン哲学に対する評価

まえがき

私（中村）の別掲論文「学問の方法と訴訟理論」にて述べてあるように、私の訴訟理論の骨格をなす「階層の理
ハルトマンの哲学思想（杉田・永島）

論」は、自然科学と次元論に触発され、発想したものである。しかして私は、それを訴訟理論として体系づけたのであるが、後に偶々、ハルトマン (Nicolai Hartmann) の論文「範疇の法則」(Kategoriale Gesetze, Philosophischer Anzeiger, 1.2.1926. Köln)を手にして、その構想の極めて一致するところあることを見出した。私は、この論文により、私の「階層の理論」が、もともと哲学と無縁のものでなく、哲学にその基盤を求める途のあることを示唆せられた。

ハルトマン哲学は、あまりわが国には紹介されていない。それが何故であるかは、ここで触れないでおく。哲学者間でそのようなのであるから、法学者には、全く未知というてよからう。しかし他はいわず、その範疇法則論の核心をなす「層位(階層)構成」の思想は、依然としてカント哲学の影響を脱し切れず、方法論にて行詰まれる法学界(それは、日本ばかりとはいえない、ドイツも然り)に新たな視野を展開するものと、私は考える。

数年前、本稿の執筆者、杉田勇、永島輝雄両君に、このハルトマン論文(範疇法則)の翻訳のことを謀った。ともに早稲田大学大学院にて西洋哲学を専攻し、現在、わが国士館大学にて哲学並びに語学を担当する青年学徒である。兼ねてより、ハルトマン哲学に関心をもたれた両君は、双手を挙げて、私の提案を快諾された。爾来、孜々として翻訳のことに当り、休暇中も大学研究室に会合して共訳に従事されたという。先頃、漸くそれを完了し、さらに詳細な「註記」までものせられている。目下、両君の恩師である本学教授小山甫文先生(元早大教授)の手にて校閲中であるが、不日、完了の上は、出版の運びに至る予定である。

それはそれとして、私の今回の論文にて、ハルトマンの範疇法則に言及しているので、それを一応、簡単ながら解説し、紹介しておくことは、読者のため便宜であろう。そこで、再び両君を煩わし、この稿の執筆を依頼した。従って私の稿と一体をなす関係にあるといえよう。

序でながら、この稿において、ハルトマン哲学が、わが国にて好感をもって迎えられていない例として、故三木清氏の書翰を引用してある。そのうちの非学問的な批判は、この際、論外として、故西田博士が、ガイストロース(精神を欠く)と書いて来られたと述べてあるところに、何かしら引掛かりを感じる。そのガイスト(精神)とは、西田博士にとっては世界観であり、三木氏にとってはイデオロギーであろう。世界観ないしイデオロギーを欠いたからとて、哲学として無価値というものでもあるまい。それはハルトマン哲学に対する有力な批判であっても、三木氏の如く、全面的抹殺の論拠とはなしえない筈である。

ハルトマン哲学は、価値実在主義(value realism)をとり、その方法が、準科学的(proscientific)であることにより経験主義的色彩をもつ存在論(ontology)となっている。その故に神学(theology)と論理的に和解し難い面をもつ(The Encyclopaedia of Philosophy, Vol. III. P. 420)。このことは、特定の世界観ないしイデオロギーとの関係についても同じと考える。また、それなるが故に、彼の哲学は、純規範科学としての法学の領域に受け入れられる性質をもつといえよう。この点、弁証法(dialectic)と異なる

(中 村 宗 雄)

一 その生涯と主な著作

N・ハルトマン (Nicolai Hartmann) は一八八二年二月二〇日ラトビヤの首都リガに生まれ、ペテルブルク大学で医学、古代文献学、哲学を学び、後にマールブルク大学でコーエン・ナトルプの教えを受け、一九〇九年そこで哲学の大学教師資格を獲得した。一九一四年より一九一八年にかけて兵役につき、一九二〇年マールブルク大学助教授となる。一九二五年ケルン大学、一九三一年ベルリン大学、一九四九年ゲッティンゲン大学教授を歴任し、一九五〇年一〇月九日ゲッティンゲンで没す。

ハルトマンは、その経歴が示しているように、初めは古代哲学の研究に重きを置いた。著書としては「プラトンの存在の論理学」(Platos Logik des Seins, 1909)、「プロクロス・デア・アドフスの数学の哲学的基礎」(Des Proklus Diadochus philosophische Anfangsgründe der Mathematik, 1909)、「生物学の哲学的根本問題」(Philosophische Grundfragen der Biologie, 1912)がある。その後マールブルク学派の論理主義的観念論と新カント主義の影響の下に、認識論(Erkenntnislehre)が彼の主な研究の対象となった。しかしハルトマンは、認識は対象の産出であり、思惟は存在と同一であるといったマールブルク学派の合理主義的主観主義から脱却して、認識はむしろすべての認識に先立って、しかもそれからは独立して存在する自体存在者の把握であるとなし、實在論(Realismus)の立場に移って行った。このような彼の思想上の転期に重大なる影響を及ぼしたのが、当時行なわれていたフッサール、M・シェーラ

ーの現象学であり、歴史上の哲学者としてはアリストテレス、カント、ヘーゲルがあげられる。しかし、彼の哲学は十九世紀の思想を克服して構築されたものといえる。また実証主義、主観主義、唯物論、機械論には彼は真向から反対している。かくして彼の最初の主要著作として「認識の形而上学綱要(Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis, 1921)」と「倫理学」(Ethik, 1926)が現われた。マールブルクからケルン時代にかけて「ドイツ観念論の哲学」(Die Philosophie des deutschen Idealismus, Bd. I, 1923, Bd. II 1926)二巻が出され、またこの頃から存在論(Ontologie) 特に一般範疇論(Allgemeine Kategorienlehre)の構想がなわれており(Philosophen-Lexikon, Bd. I, 1949) 中村博士が注目された「範疇法則」(Kategoriale-Gesetze, 1926)もケルン時代のものである。その他の重要論文としてこの時期に属するものをあげれば、「アリストテレスとヘーゲル」(Aristoteles und Hegel, 1927)「観念論と實在論の此岸」(Diesseits von Idealismus und Realismus, 1924)「いかにして批判的存在論一般は可能であるか」(Wie ist kritische Ontologie überhaupt möglich? 1924)である。上記の主著及び小論文によってハルトマン哲学の立場、方法論は確立されたといってもいいであろう。それと共にハルトマンの関心事が認識論(Erkenntnislehre)を基礎としてそれより存在論(Ontologie)へと指向されていることは、次のベルリン時代の四つの主著よりして明らかである。すなわち「精神的存在の問題」(Das Problem des geistigen Seins, 1933)「存在論の基礎づけのために」(Zur Grundlegung der Ontologie, 1935)「可能性と現実性」(Möglichkeit und Wirklichkeit, 1938)「實在的世界の構造——一般範疇論綱要——」(Der Aufbau der realen Welt—Grundriss der allgemeinen Kategorienlehre, 1949)がそれである。戦後刊行された主なものとしては、ゲッティンゲン大学の夏学期になされた講義をもととした「哲学入門」

(Einführung in die Philosophie, 1949) ——これは彼の哲学全般の案内書ともいえる——特種範疇論の一つとしての「自然の哲学」(Philosophie der Natur, 1950)「目的論的思惟」(Teleologisches Denken, 1951)「美学」(Ästhetik, 1953)「小論文集」(Kleinere Schriften, 3 Bde, 1955~1958)等があげられる。

二 方法論

次にハルトマンの哲学思想について、その方法論から略述していこう。ハルトマンの方法論は三段階に分けられる。(一)現象分析、(Analyse des Phänomens) (二)問題分析、(Problemanalyse) (三)解決の試み (Lösungsver-suche)。

第一の「現象分析」とは一切の先入的立場、すなわち観念論と實在論から離れて、現象そのものをその本質において明瞭に記述することである。哲学的立場と体系によって整理され単一化された現象だけが問題の対象ではない。現象の局限によって問題を作成することでもない。何よりもまず問題を取り扱う前に、現象そのものを立場以前において純粹に分析しなければならない。この方法はフッサールがすでにとっている。しかしフッサールの方法は、純粹意識そのものを内在的に研究する立場をとる。そこにおいては現象は純粹意識だけに限られ、現象は局限されてしまう。現象は意識の内在の対象だけではない。意識から独立して存在するものが取り扱われるべきである。

ハルトマンの哲学を従来の哲学と区別できるのは、前者が問題の形而上学 (Metaphysik der Probleme) であり、後者が体系の形而上学であることによってである。体系が先きに構成され、その体系の立場から問題が取捨される。従ってその体系においてはすべての問題が解決されたものとみなされてしまう。ところが人間の認識は、限界をもつ。解決可能・不可能の限界が、依然として存在する。この限界を飛躍的に超越してしまうのは、独断的越権である。ハルトマンはこの解決できない問題を残すことを「批判」(Kritik)と言っている。これによってハルトマンの哲学を批判的形而上学とよぶことができる。

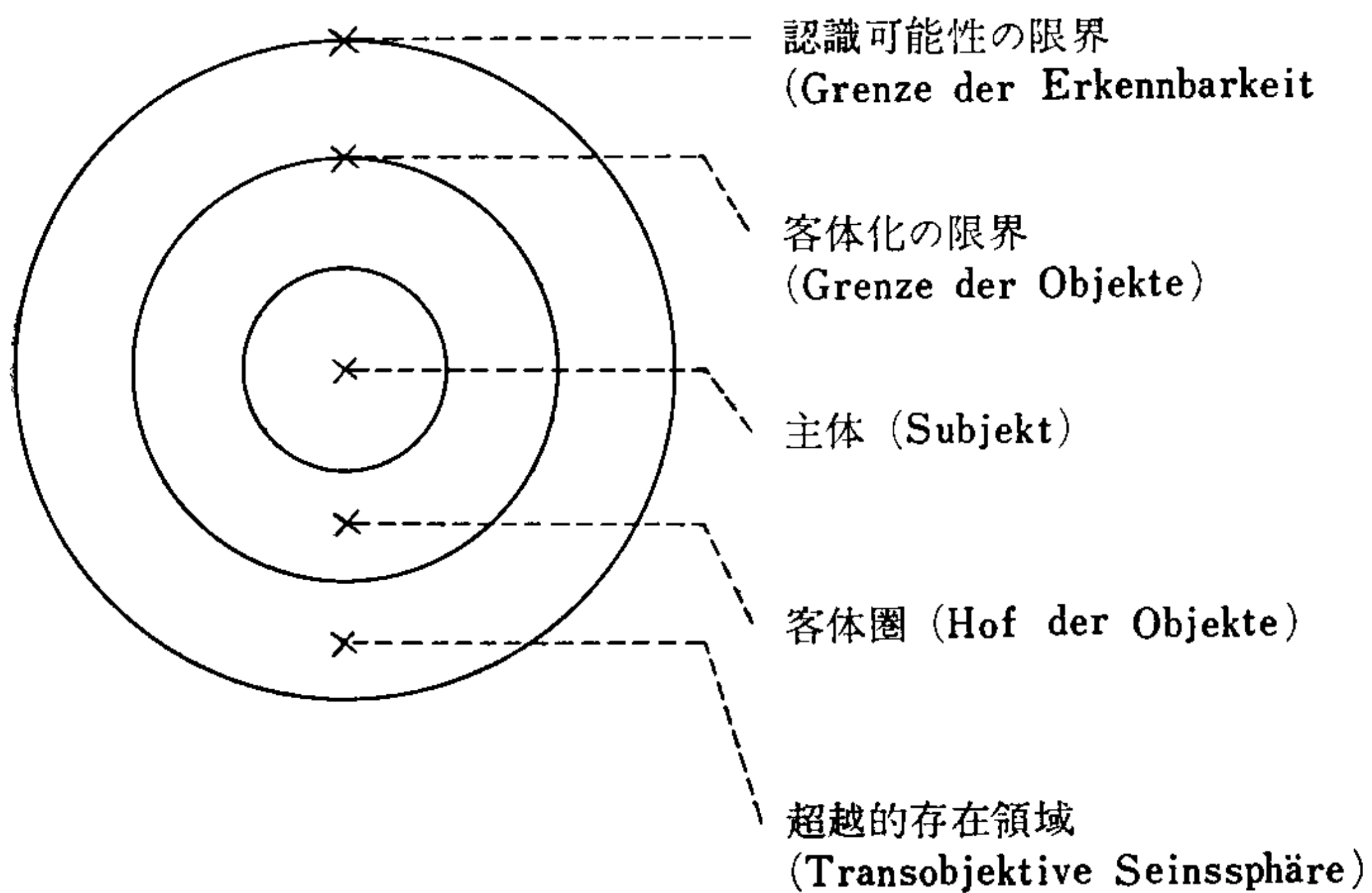
現象分析の次に、第二の「問題分析」が行こなわれるが、ハルトマンの方法論の特徴はこの問題学、すなわち Aporetik にある。そしてこの問題学によって指示されることは、現象の含蓄する二律背反とその中に明らかにされる矛盾である。たとえば意識の二律背反としてハルトマンは、次のように言っている。

定 立 意識は自己の外部にあるものを把握する限り、自己から脱け出すことができる。

反定立 意識は自己の内容を把握する限り自己から脱け出すことができない。

このような二律背反は、解決できない。ヘーゲルが行こなうような、定立、反定立、綜合の過程において解決されるべきものではない。ヘーゲルの弁証法は、不幸な問題解決を行なったにすぎない。解決できない問題を取り扱うのが、問題学なのである。

第三の方法は「解決の試み」となっている。この解決の意味は、全体の解決でなく、あくまでその一部のそれであるということである。合理的なものと非合理的なものとを区別することによって、理性の領域は合理的なものの領域であることが分かる。そして合理的なものの領域をひろげて、非合理的なものへ認識は前進するが、最後にどうして



も前進できない限界に達する。これが可認識性の限界である。そこで問題発生領域は超客観的存在領域である。理解が止まれば問題が与えられる。現象分析をし、問題分析をして、問題解決の試みが成功すれば客観化の限界が拡張したことになる。

このように無限の理解の進歩が可能であるが、しかしそれはすべての問題が解決できるであろうということではない。その中に、解決の指示が含まれているにはかならない。

三 認識論と存在論との関係

ハルトマンによると、認識は「存在する」主観と「存在する」客観との関係であり、認識が成立するためには、主観は自ら意識の外に超越して客観の規定を把握し、再び自己に戻って来なければならない。このように主客の関係をもって、意識を超越した関係と見、認識関係を一種の存在関係という地平において理解しようとするのが、ハルトマン哲学の特色である。従って彼の認識論

の大前提となっている概念は、主客の自体存在と超越とである。かくして「対象の認識」の問題は「認識の対象」の問題、すなわち「存在の問題」へと直結することになる。存在論の建設は彼の哲学の中心課題である。その第一歩を進めたのが「認識の形而上学綱要」である。自体存在としての主観と客観との関係が意識超越的な関係であるとすれば、それは一つの形而上学的関係であり、これを問題とする認識論は認識の形而上学でなければならない。このような基礎によって対象の認識を論ずるのがハルトマンの認識論である。

認識の対象となる自体存在者は二つに分けられる。ハルトマンはこれを実在的存在と理念的存在と名づけ、すべて存在するものは、このいずれかに属するものとした。前者は時空的、後者は超時空的存在であるが、いずれも自存している。実在的存在の自存は、世界そのものの所与性からして明らかであり、また理念的存在（数学的のもの、論理的なもの、本質、価値）についても、その在り方、たとえば道德的価値は、それが現実存在するか否かに関係なく、独立して存在している。ハルトマンの存在論の体系は、その著作との関連づけにおいてこれをみた場合、凡そ次のようになるであろう。(一)存在要素の研究、すなわち定在 (Dasein) と相在 (Sosein) の相互関係の研究——「存在論の基礎づけ」、(二)存在様相の研究——「可能性と現実性」、(三)範疇論——一般範疇論と特殊範疇論——「実在的世界の構造」、「精神的存在の問題」、「自然の哲学」以上の三部門に分けられるであろう。

ところでハルトマンは、実在的存在をば無機物、有機体、心的なもの、精神的なものの四つの階層に区分している。おのおのの層にはそれ特有の範疇が存在するが、他方すべての層に共通した範疇も存在する。層全体に行き渡っている範疇を、ハルトマンは基礎的範疇と名づけている。「範疇法則」にあげられているものと若干の相違はあるが、

「実在的世界の構造」においては、基礎的範疇として次の一二組の対偶関係が挙げられている。一、原理—具体的なもの 二、構造—様相 三、形相—質料 四、内的なもの—外的なもの 五、規定—依存 六、性質—分量 七、統一—多様 八、一致—対抗 九、対立—次元 一〇、不連続—連続 一一、基体—関係 一二、要素—組織。

「範疇法則」は、この基本的範疇にもとづいて導き出され、実在的存在の階層構造がそれによって明らかにされる。

四 範疇法則

次にハルトマンのいう「範疇法則」(kategoriale Gesetze)の概要を述べる。ところで範疇(Kategorie)とはどうゆうものであるか。範疇はとかく言表の根本形式、すなわち思惟の形式、把握の形式、表象の形式であると考えられるが、一方それは、対象の形式、存在するものの原理であるとも考えられて来た。觀念論者のように、意識の原理だけを認めようとすることも、また实在論者のように、存在するものの原理だけを認めようとすることも、間違っている。更に両者を全く同一視することも存在するものを見損うことになる。両者な完全な一致は不可能である。人間にとっては部分的一致のみが可能なのである。

ここにおいて存在範疇と認識範疇との関係、すなわち範疇の根本関係が問題となる。存在範疇と認識範疇とが部分的に一致する限り、合理的なものと非合理的なものとの境界を認めなければならない。存在範疇と認識範疇との完全な一致は予見することができないが、範疇の本質はやはり理解の基礎であり、同時に存在するものの基礎であることにある。そして存在するものの基礎のうちに理解の基礎を見つけようとするのが、範疇分析の課題である。原理によって決定を受ける具体的なものは、自己の構造のうちに範疇をもっていなければならない。この構造分析が範疇分析となる。この分析は、次の区分によって行なわれる。

A 水平的差異 (horizontaler Abstand)

- 同じ高さの範疇間における内容的差異——
- (一) 妥当法則 (二) 凝集法則

B 垂直的差異 (vertikaler Abstand)

- 高次と低次の範疇の差異——
 - (三) 階層法則 (四) 依存法則
- 次に、各法則について述べる。

(一) 妥当法則 Die Geltungsgesetze

範疇は具体的なものに妥当してのみ存在する。範疇は具体的なものなしには無である。

I 原理の法則 *Das Gesetz des Prinzips*

妥当するとは範疇が具体的なものに対し原理—存在であることである。範疇が原理であることによって、具体的なものを規定し決定する。かくして具体的なものも、範疇なしには無となる。このように範疇は、原理—存在として具体的なものに依存しつつ独立なのである。

II 層妥当の法則 *Das Gesetz der schichtengeltung*

範疇が具体的なものを決定する仕方は、その妥当の限界内においては、範疇がすべての具体的なものを例外なく規定し、しかもこの規定は決して取り消すことができない、というようにである。すなわち決定の不可侵性、妥当の無例外性である。

III 層依属の法則 *Das Gesetz der Schichtenzugehörigkeit*

ある範疇層はそれに依属する具体的なもののみを決定するのであって、他の範疇層に依属する具体的なものを決定することはできない。

IV 層決定の法則 *Das Gesetz der Schichtendetermination*

具体的なものは、その依属する範疇層によって残りなく完全に規定される。この範疇的規定性は、十分な決定充実

を含み、完結したものであるがゆえに、その層の具体的なものは、他の方向からの規定を必要としない。

(二) 凝集法則 *Die Kohärenzgesetze*

一つの層の範疇は、個々の範疇に分解できないような強固な統一的規定をもつ。

V 複合の法則 *Das Gesetz der Komplexion*

これは根本法則であり、次の三つの法則は、この法則の系として導き出される。具体的なものの決定は、一つの層の諸範疇がそれぞれ別個に行なわれるのではなく、それぞれ共同して複合的に行なわれる。

VI 層統一の法則 *Das Gesetz der Schichteneinheit*

具体的なものの決定が複合的決定であれば、一つの層の範疇群はそれ自身緊密な統一性と完結性において形成していなければならない。

VII 層全体性の法則 *Das Gesetz der Schichtenganzheit*

層統一の法則の裏面的性格である。統一的範疇は、全体性によって制約づけられており、従って、全体性に対して、一つの層の範疇の各要素は独立性をもたない。しかも層の全体性は各要素より先きなるものである。しかも両者

の関係は相互制約性においてである。すなわち層の全体性も各要素の多様性によって担われているからである。

VII 含蓄の法則 Das Gesetz der Implikation

個々の範疇が層の全体性によって制約されながら、各範疇は最高のものであり、相互に多様に依存している。ここでも各範疇は相互制約性にあることが分かる。すなわち各範疇は他の範疇を自己の前提あるいは要素として自己の中に含むのである。二つの対立項の間には、連続的移行の系列があり、その対立は、矛盾対立でなく、反対対立である。むしろ対立項は相互に予想し合うのであって、それは一方が他方の本質の中に含蓄されることを意味している。

(三) 階層法則 Die Schichtungsgesetze

具体的なもの重なり合いと範疇の相互嵌入によって特徴づけられている。

IX 再現の法則 Das Gesetz der Wiederkehr

低次の範疇は高次の範疇においてその部分契機として再現する。しかし高次の範疇は低次の範疇において再現しない（非可逆的）。

X 変化の法則 Das Gesetz der Abwandlung

その再現は低次のものすべてがそのまま高次の範疇において再現することを意味するのではなく、高次の範疇においてそれらが統一され凝集され、低次の要素は、次第におおわれ多様に変化することを意味している（変貌）。

XI 新規なものの法則 Das Gesetz des Novums

高次の範疇は内容的に多様な低次の要素によって組立てられるが、しかしその和につきるものでなく、常に低次の要素の中にも、その総合の中にも含まれず、それにも分解されない特殊なもの、新規なものの出現を含んでいる。これが層相互間の混合を防ぐ。新規なものは低次の範疇に対して独立である。

XII 層距離の法則 Das Gesetz der Schichtendistanz

新規なものの出現は、各層の連続的移行を不可能にする。すなわちそれは、物質と生命、生命と心、心と精神との間に移行不可能の切れ目のあることを証拠立てている。

(四) 依存法則 Die Abhängigkeitsgesetze

低次の範疇が高次の範疇において再現し、その逆は不可能であるから、高次の範疇は低次の範疇に依存し制約されることになる。しかしこれは部分的依存であり、高次の範疇の独立に対して広い余地を残している。

XIII 範疇的根本法則（強さの法則）Das Kategoriale Grundgesetz (oder das Gesetz der Stärke)

高次の範疇は制約され、依存的であるから弱い範疇で、低次の範疇は制約し規定づけ非依存的であるから強い範疇である。しかも低次の範疇が高次の範疇に再現するに際して、上部へ行く程その再現の貫徹力は弱められるが、しかし強さの法則は、どの存在層の切れ目でも中断することがない。すなわち有機体は物質の上部形成として、意識は有機体の上部構築、精神は意識の上部構築として存在する。

XIV 層独立性の法則 Das Gesetz der Schichtenselbständigkeit

高次の範疇は低次の範疇なしには成立しないが、低次の範疇は高次の範疇がなくても成立する。従って低次の範疇は高次の範疇によって制約されず、自ら独立して決定をなす。

XV 質料の法則 Das Gesetz der Materie

低次の範疇は、高次の範疇の原理でなく、新しい形成の質料にすぎない。その上部における高次のものの活動余地は、無制限である。従って低次の範疇は、一切の高次の範疇に対して無関心な態度をとる。

XVI 自由の法則 Das Gesetz der Freiheit

層独立性は高次の層に対する低次の層の独立性であるが、低次の層に対する高次の層の独立性もまた存在する。すなわち高次の層の決定は、質料としての低次の決定を含むが、しかしそれによって規定を受けないで、むしろそれに

対して自律的である。高次のものは依存してのみ自由である。その自由は分離的、絶対的なものでなく、关系的、相対的自由である。

ちなみに、「範疇法則」(XIV)、「層独立性の法則」は、「実在的世界の構造」においては「無関心の法則」(Das Gesetz der Indifferenz)となっているが、内容的には全く同じで、両者における法則の展開には変りはない。

五 倫 理 学

ハルトマンにおける倫理学の第一の問題は、「なにを為すべきか」であり、第二の問題は「価値あるものはなにか」ということである。しかし第二の問題は第一の問題の上位にある。価値を知ることによって行為決定ができるからである。従って倫理学は価値論となる。

価値の本質は、超時間的超歴史的であり、絶対的である。変化するのは、価値についての意識であって、価値そのものではない。価値をその無限の豊さにおいて発見し、これを行為へと決定させるために価値を明らかにすることが倫理学の課題である。従って人間が勝手に価値基準を定めて、これによって価値を主観性から投与するということではなく、人間は価値を志向し、価値を見る眼を鋭くするということに道德の意義が存している。

価値はまた理念的存在である。数学や論理学の命題がこの存在と同じように考えられる。たとえば二に二を加えて

四であるという真理の存在である。この真理は、人が認めようと否とに關係なく、常に成立する。この存在は、純粹に理念的存在といふことができる。価値の本質は、プラトンのイデアの世界である。

価値認識は、経験によらずに、先驗的に直観する。たとえば、良心は一切の経験に先んじる先天的価値意識である。しかし現実には価値の多様性によっておおわれて、その統一がなされていない。価値の統一は道徳的生活の根本要求であるが、まず多様な価値相互間の關係から始めるべきである。そこに発見された価値の体系こそ、価値の統一体系なのである。

行為は、常に価値あるものを目的としている。しかし価値決定を受けるか拒むかの自由が、人間に存している。価値規定は、倫理的領域において絶対的な力ではなく、その規定力は範疇よりも弱い。道徳性とは、価値に従うかそむくかの自由の可能性の中において、価値に従うことにある。この価値に従う決定は、道徳的原理とは独立な決定なのである。

倫理的現象において、因果關係と目的關係が階層關係をなしている。因果法則性は、自然を決定づける唯一の法則である。道徳的意味においては、目的的に規定された法則が人間を決定づける。この二種の決定の間の關係について、範疇階層の理論に従うならば、因果關係が目的關係の前提をなすから、因果關係は強い範疇であり、目的關係は、因果關係なしには成立しないから、目的關係は弱い範疇である。しかも因果關係は目的關係なしにも成立する。そしてこの因果的決定は、高次の決定すなわち目的的决定に対して無關心であるから、目的的决定は自由な活動余地を因果的決定に対してもつ。

ところでハルトマンの思考する人格決定は価値決定より高次の自律なのである。因果的決定の上に目的的决定が範疇的高次の法則として働くのではあるが、これらの法則性の決定はまだ人格の決定ではない。ここにおいて第三の法則である人格的决定をより高次の法則として因果的决定と目的的决定の上位に置くのである。人間が価値あるものに従うのは目的的决定から強制されたわけではなく、人格が自律的に人格のもつ原理によって決定されたからである。この人格的决定の存在する証拠として、良心が価値の要求に応ずるのは理念によってではなく、人格内に存する実在的决定力によってであるという例をあげている。責任感、尊敬、信頼等の感情においてもその現われがある。しかしこの決定力をこれ以上明らかにする見込みはない。因果的決定と目的的决定の上位に、新しい決定が存在することを指示することができるだけである。

六 ハルトマン哲学に対する評価

さて、ハルトマンの哲学は現代にいかなる存在意義を有するか。ハルトマンの哲学は、わが国では余り、否、殆んど研究がされていない。これは時流の哲学に左右されるわが哲学界の因襲、後進性がその一因をなしていると思われる。かつては、カント、ヘーゲル、新カント派哲学、現在では実存哲学、科学哲学の訳書、論文で賑わっているが、ハルトマンの研究物は翻訳、著作とも若干現われているに過ぎない。それ程に、彼の著書は軽視、いやそれどころか實際読まれていないのである。たしかにハルトマンの哲学は地味で、飛躍がなく、感興をもよおし難いが、

豊かな常識と、広い視野に立ち、常に控え目に立論する彼の学的態度は、結論を急ぎ、流行を追う学徒にとって学ぶべき点であると思う。特に体系の形而上学ではなくて、問題の形而上学を提起し、問題の解決ではなくて、難問をそのものとしてわれわれに提示した彼の方法論は見逃すことができない。

ハルトマンの評価について彼のマールブルク時代(一九二二—一九二四)に関するものと、第二次大戦後に関するものとを内外の代表的哲学者の言を参考までに引用してみよう。三木清は一九二二年から二四年にかけてマールブルク大学でハルトマンの講義、演習に出席しているが、余程腹にすえかねてか、再三再四ハルトマンのことを書簡の中で報じている。田辺元宛では「……私はハルトマンにすっかり失望しました。この間から同教授の Die Philosophie der deutschen Idealismus (ドイツ観念論の哲学) という著書を覗いていましたが、あまり好い出来だとは思いません。……ヘーゲルの Seminar も感心できません。ヘーゲルの論理学に出てくる色々の概念をあちらへ動かしたり、こちらへ動かしたり、ただ概念の Schauspiel (遊戯) をやっているに過ぎません。論理的でないにしても Kierkegaard (キエルケゴール) などの方の考え方がずっと dialektisch (弁証法的) に動いていると思います(一九二三・二四)。同じような文面で、友人宛次の様に書いている。「私はすっかりハルトマンに失望した。彼の講義振りは theatralisch (芝居がかった) といっているほど技巧の多いものである。彼は手品師のように手際よく問題を取扱う。然し彼の考え方は如何にも bequem(安易)で tiefgehend(深奥)でない。ヘーゲルのゼミナールなど少し気の毒だ。……人気もあり自惚もあるようだが、私はハルトマンがそんなに偉くなる人だとは、どうしても信じる事が出来ない。私は彼のとりすました、勿体振った態度に寛ぎを感じるわけにいかない。この話を下宿の主人は私から聞いて恐らくハルトマンの

妻君が Du bist der grösste Philosoph in Deutschland (あなたはドイツ最大の哲学者よ) と言ったのだろうと、言って笑っていた。」(一九二三・二六)更に同人に宛てて「ハルトマンは相変わらず面白くない。仕掛ばかり大きくて人を驚かすが、深いところも細かいところもないと思う。いくら大仕掛けでも動かない機械は困る。」(一九二三・二九)マールブルクに来てから二ヶ月、三木はハルトマンにますます嫌悪の情を示している。いわく「私はハルトマンの Realismus (實在論) を物足らなく思う。……ハルトマンが二三学期前にやった Metaphysik (形而上学) の講義を読んでもみた——もう一度だけハルトマンの批評を書かせてくれ給え——まるで哲学史に出て来る Grundbegriffe (根本概念) の Aufstellung (陳列) だ。概念を統一する力強い思索力が少しも出ていない。少し大きな商店の Schaufenster (ショーウィンドウ) のようにきれいに陳列が出来ておる。美しい Fräulein (令嬢) 達が立ちどまって「好いわね」と言うことは確かだ。こう書けばハルトマンの講義が、どうして人気があるか、君にも分るだろう。」(一九二三・二五)一九二四年一月九日、田辺元にも同じ内容の書簡を送り、ハルトマンは非常に problematisch (疑問が多く) て、世間の評判は当てにならぬと述べている。同年一月一〇日付に記されたハルトマン批判はなかなか厳しい。「ハルトマン——小説の慣用の訳語を借れば——おお私のハルトマン、君はハルトマンの Metaphysik der Erkenntnis (認識の形而上学) を読もうというのか、私は君にそれを勧めようとは思わない。……しかしながら自分の分別を矜るべき年頃のあんな人々がハルトマンをかつぐというのは、彼の哲学的感覚の鈍さを示すものとしか私には思われない。」二月になって三木はハルトマンの下を離れる決意をしている。「来学期は、ハルトマンは講義に少し出でみるだけで演習の方はやめようと思う。私は彼のために既に多くの退屈な時間を過して来た。西田先生からハルトマンの Metaphysik

der Erkenntnisを読んでの感想に『geistlos (魂のぬけた) 本だ』と書いて来られた。」(一九二四・二)

以上のような青年三木のハルトマン観が、現在まで、わが哲学界に跡を牽いているようである。

これに対し、第二次世界大戦後における西欧の哲学界において、以上の三木といい対象をなすのが、ボヘンスキーであって、その著「現代のヨーロッパ哲学」(一九二五)の中で、ハルトマンを高く評価している。いわく「ニコライ・ハルトマンは、疑いもなく現代哲学の最も重要な人物のひとりである。ホワイトヘッドおよびマリタンとならんで、彼は二十世紀の形而上学の開拓者のひとりと見なされなければならない。ホワイトヘッドやマリタンほど体系的ではないが、彼の味は、分析の精緻さと、自己の思想を明晰な形式で、しかもその内容の明瞭さ深さによって魅了しつつ発表するという、ドイツ人にはあまりみられない才能とにある。彼の諸労作は、冷静な厳密さと学問的な徹底さのまことの典型である。」(岩波書店)「……これらの体系を評価するに当っては、十九世紀末の哲学が事実もち出す力をまったくもたなかったものを、すなわち存在論と全現実の有機的把握とを、その体系(ハルトマン、筆者註)がどこまで持ち出すことができたかを、まず何よりも考慮に入れなければならない。この二重の点から現代の形而上学を吟味してみると、ハルトマンは実にすぐれた存在論者であることがわかる。」(全二八) (九頁)

現在までのところ、わが国の哲学界ではハルトマンに対する批評は、概して三木書簡に示された域を出ていない。しかし法学の分野では、戦後注目さるべき現象が起って来ている。たとえば刑法におけるヴェルツェルの「目的的行為論」(Finale Handlungslehre)がそれであって、これは思想的系譜としては、ハルトマンの範疇法則——特に自由の法則——の影響の下に人間行為の存在論的な構造法則を明らかにしようとするものといえよう。わが国刑法学界

には、この目的的行為論が盛んに紹介されている。(参照、団藤重光「刑法綱要」昭和三二年、六九頁―七三頁。木村亀二「刑法総論」昭和三四年、二三九頁。一六五頁以下。同著「新刑法読本」昭和三六年)

訟理論における中村宗雄教授の「階層の論理」(Schichten-Logik)は、教授が新たな訴訟理論の構築を目指した思索の結果、最後に到達した学問方法であるが、図らずも、それはハルトマンの存在層の理論と機を一にするものとして注目すべき学説である。(参照、中村宗雄「法の体系と民事訴訟制度」昭和三九年、日本学士院紀要第二卷、「私の裁判理論」昭和四一年、早稲田大学法学会誌第一六卷等)

このようにして、ハルトマン哲学は、法学の領域にてちくじその関心を購いつつあるようである。今回、中村教授が、新稿「学問の方法と訴訟理論」(本誌)にて、その階層理論を展開し、ハルトマンの範疇法則論に言及されているので、それを機として、ハルトマン哲学の一端を紹介するため、本稿を執筆した次第である。

ハルトマン哲学の研究は、今後に期して待つものがあると思われる。